匪賊の笛

森崎和江

「からゆきさんが抱いた世界」ほか

筑豊の坑底から
アジアへ拡がる不可視の坑道を
自らを現世の匪賊としつつ
辿りゆく

匪賊の笛

森崎和江

葦書房

著者略歴

1927年朝鮮慶尚北道大邱府に生まる。
著書に「闘いとエロス」(三一書房)「異族の原基」「奈落の神々」(大和書房) 詩集「かりうどの朝」(深夜叢書社) 「からゆきさん」(朝日新聞) ほか
現住所　中間市本町6-10組

匪賊の笛

昭和49年11月30日初版第一刷発行
昭和51年 7月20日初版第二刷発行
著　者　森崎和江
発行者　久本三多
発行所　葦書房有限会社
福岡市中央区舞鶴1丁目4番7号 (810)
電話 092 (761) 2895　振替　福岡 39430
印刷所　正光印刷株式会社
製本所　美伊製本有限会社
落丁・乱丁本はお取替えいたします
0095—7406—0135

目次

I

朝やけの中で　8
アイヌ系にほん人　10
島の自画像　19
民衆ことばの発生　28
未熟なことば・その手ざわり　40
肉体のことば　55
創造性の変革とその継承　77
内語とこども　90

II

差別と禁忌　98
京ノ方ヲ向イテ拝ムガヨイ　113
民衆の内在律と天皇制　121
仁儀的侵略　131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

暗闇からの発信 136
日本への三下り半 140
Ⅲ
民話とくらし 144
白い太陽 148
マンスデ芸術団 152
国境の島 156
朝鮮の夏・雑感 161
からゆきさんが抱いた世界 174
タコべやくらし 189
電話と少年と 192
Ⅳ
三つのハンコ 198
性のやさしさを 202

日本の娼婦性 225

V

ちいさないわし 234
思い出せないこと 238
視点 241
鯉のぼり 254
晩熟 257
枯れ葦のむこうに 260
ぎんなん 263

あとがき 267
初稿発表覚書 270

匪賊の笛

装画　横尾龍彦

I

朝やけの中で

八つか九つくらいの年頃だった。朝はまだひんやりしていた。私は門柱によりかかって空をみていた。朝陽がのぼろうとしていたのだろう、透明な空が色づいていた。

朝早く戸外にノートと鉛筆を持ち出して、私は何やら書きつけていた。が、空があまりに美しいので、その微妙な光線の変化を書きとめておきたくなって、雲の端の朝やけの色や、雲を遊ばせている黄金の空にむかって感嘆の叫びをあげつつ、それにふさわしいことばを並べようとしはじめた。けれどもなんという絶妙な光の舞踏……。

私はあの朝、はじめてことばというもののまずしさを知ったのである。絶望というものの味わいをも知ったのだった。自然の表現力の美事さに、人のそれは及びようのないことを、魂にしみとおらせた。打ちしおれる心と美事な自然のことばに声を失う思いとを、共に抱き、涙ぐむようにしていると、父が出てきて、笑顔をむけてくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

何を話してくれたか、もう記憶にない。ただあの時の強い体験にふさわしいようないたわりが、父から流れてきたことだけが残っている。空がしろくなり、人間たちの朝が動いて行くけはいが満ちた。

いつのまにか文筆にかかわって生きてきたけれど、ことばに対する私の感じ方のなかには、あの朝の体験が深くひろがっているようである。それは人間たちのふかぶかとした生のいとなみのなかで、言語化されている部分のちいささ、まずしさへの思いである。いや、まだことばになっていないひろい領域のあることに対する、いとしさである。

私が閉山してしまった炭坑町にまだとどまっているのも、地面の下で特有な感性を開拓した人人が、言語化しがたいものを抱きつづけているのを感ずるためである。ことばは朝やけの中の八歳の少女のようだ。

アイヌ系にほん人

アイヌ系にほん人について私はほとんど無知に近い。その文化も歴史も生活についても近年まで知ること少なかった。国土の北方では日常生活の上でも交渉がふかかったはずの先住民族なのだが、私はこのように、何の知識も持つことなく生きてきたのである。

このことはそのままアイヌの苦悩を裏書きしていることになるにちがいない。庶民の常識のなかにまっとうな影を落してはいないということは、固有文化を伝える機会もなく、かえりみられぬまま今日に到っていることをいみしているのだから。昨今は観光旅行がさかんになり、アイヌは観光化されることによって情報網にのりはじめた感がある。そして北海道をおとずれた和人たちは、悪意もなく観光地のアイヌへ問うという、「にほん語が話せますか？」などと。

私は思い出す。朝鮮を植民地としていた当時その朝鮮から私たち植民者二世は「内地」へ修学旅行に出た。すると内地人はたずねたものである。「にほん語が話せますか？」と。

にほん語しか話せなくなった悲哀をアイヌが抱いていないとは、いいきれない。その民族文化を誇りたかく伝承するための、基盤の一切を、同じ国のなかの多民族である私たちの歴史が破壊しつくした。敗戦ののちの、デモクラシーといわれる風潮のなかでもアイヌ文化を伝承する機関のごときものさえ生まれていない。たまたまアイヌについて考える和人がいて、この圧迫と偏見のなかで混血しつつ苦悩を重ねるアイヌへこともなげに次のように言ったりするという。「特に若い人に多いのですが、……『純粋なアイヌを残す気になったら……?』と。これほど、私たちアイヌをバカにした言葉はないでしょう。大きなお世話というものです。私たちは天然記念物ではないのです」（戸塚美波子「わたしの祈り」『コタンの痕跡』より）

このように無原則な同化政策か、あるいはいかにも原理主義的な自立論のおしつけが両極となって、ひとりひとりのアイヌ系にほん人の心を傷つける。そして私はといえば、傷つく人々の間の伝統的感性がしっくりと感じとれぬまま、ひたすらうしろめたさばかりが深くなり、どぎまぎとするのである。その同化や純化の無神経なおしつけは、たとえばアイヌ娘と恋するテレビドラマや小説であったり、北海道への招待にアイヌ風俗を描いたり、北海道代表のスポーツの応援団がアイヌ姿でやってきたり等々にみられるわけだが、それはもう、冷汗でる思いで、アイヌの立場に立ちもせず風俗的に利用する和人の質を恥じながら、心うろたえるのである。アイヌの怒り悲しみが反射的に感じられるので。が、その怒りの内側がわかりかねるので。

私はこのようにアイヌの苦悩を偏見に閉ざされる者一般としてしか感じられぬことに、負い目をもってきていた。ところで大正年間に十九歳で逝った知里幸恵の、その短い生涯を追った藤本

英夫著「銀のしずく降る降る」という著書は、私のその負い目に一撃を当てた。ながい伝統とゆたかな人間性が息づいていたアイヌの個体史は私のすぐ傍に迫った。

それは両手で支えかねる厖大な民族のこころが、海面にふれる夕陽のようにひとりの詩人のなかへ沈まんとするところのようであった。まるで最後の、原初アイヌとでもいうかのような呼吸が感じられた。しかもこの少女はすぐれて近代的知性をそなえている。このふるさとに根づきしかも斬新な呼吸はその後のアイヌには不可能なようで、私はすぐれた作品を残して、つい先年亡くなった鳩沢佐美夫の遺稿集などでも感じとりがたかった、アイヌ系にほん人の感性の根にふれる思いがした。二人の間に一世代の差があった。

そして知ったのである。この二人の魂の間によこたわる裂け目を。それこそはアイヌ系にほん人の近代であり、彼らをふくめた私たちの歴史であり、そして民族意識に無知な和人の跡であった。鳩沢佐美夫は現今のアイヌの実態をふまえて鋭くにほん文化の体質を突いていた。彼にさえ知覚しがたくなった「アイヌ」を抱きこんで。彼に残されているアイヌの荒廃を抱きしめて。

私は知ったのである、何が荒廃へ追いこまれたのかを。アイヌは死語のごとき少数民族としてならば、かなり「研究」されている。それを通して私たちは、アイヌという架空の民族を描くことができる。狩猟民でシャーマンをもち「ユーカラ」を伝え、固有の神話や心情で結ばれ、にほん列島各地にその言語体系による足跡をとどめている人々を。そして現状といえば生活保護家庭も多いほど貧困に追われている北方辺境の民を。

多くは下層社会に組みこまれたアイヌ系にほん人は、いまはほぼ右のような描かれ方をしてい

るだろう。そのなかからアイヌの復権を求めて鳩沢は歩き出した。それは他の被圧迫階層の自己復権の意志と通じていると、客観することができる。アイヌがアイヌの真の姿の顕現を求めるように、他の層も、たとえば女ならば女の本来性をのびのびと生かし得る社会を求める。

こうしてアイヌの復権運動が共にあることでほっとするのは、その荒廃の外側しか見ない者の常である。その方向性に一応の救いはあろうとも、鳩沢は強く抵抗していた。彼はその内側を表現し、交流の道を生み出すことで、他の諸々の復権の意志たちが見落しているアイヌを他者の中に生かそうとしていた。

私のように「外側の悲惨」しか見る力のない者は、「差別を止そう」というようないわば同化主義の変型しか手がない。さもない者はアイヌの復権というものを、近代以前のアイヌへもどることとしてその純化主義を押しつけるような考え方しかしない。なんとももどかしい貧しさであった。というのも権力はもとより和人学者・研究者・植民者・観光客等々が寄ってたかって死滅させた、アイヌによるアイヌたちの生活圏での文化が、そこで生きた人々の情感として伝わりかね、現今のアイヌを存在として描きかねたためでもあった。

知里幸恵の短い生涯を、そのほとんど資料もない無名な少女の生のあとを辿りつつ回復させた「銀のしずく降る降る」は、著者藤本英夫氏自身の語りを極力おさえて、少女の片鱗をつなぎあわせていく。その消えるかの雪道をたどる作業をとおして、アイヌの世界が荒廃へ追われる過程はありありと浮きあがってくるのである。またそのことを予感しつつ、心身にあふれる世界を必死に文字化せんとする少女の心とが。

明治四十年代の幸恵にとって、にほん文字へその心象を転化する作業は、アイヌたちのはじめての明文化作業であり、アイヌ人によるアイヌの近代化作業といえた。が、それは彼女を身元へ引きとったアイヌ学者金田一京助の、アイヌ研究の一端でもあったのである。少女幸恵は病体に堪え、追い求めるように、その訳業をすすめているけれど、それは私にはまるで少女の肉体の移植のようにすらみえてくるのである。そうしなければ生きられない、アイヌは。あの盲目な和人と共には。そう言っているかのようである。

そして和人は和訳可能な世界を、近代の思弁世界に組みこむことによって、アイヌの世界を死語と化した。それは沖縄や与論その他の沖縄文化圏の民衆が辿った道と同じであった。あるいは村々を追われ、世上の人々が地獄だといって別世界視した炭坑へくだった貧困者の辿った道とも同じである。思弁世界への訳語可能な要素ばかりが抜き去られ、生きた個々の存在も、その存在が歴史時間のなかでもまれつつ創り出す精神世界も、それはもはや不要なものとしてあつかうその近代日本の姿は。

私は私が知感し得たところのヤマの人々や沖縄・与論島民などの、その荒廃過程の内部のように、この少女をとおしてアイヌ系にほん人の近代がそくそくと伝わることに感動させられた。それに力を得て、鳩沢佐美夫青年がヤマの男や女たちのように復権過程を辿ろうとしている、その内部の無言部分の手ざわりが感じとれたのである。

この二人の詩魂は、対をなして、アイヌの民族的感性およびその回復過程を、和人私へ伝えた。それは少女幸恵をそのあるべき姿でみようとした藤本英夫氏の意識のたまものでもあり、また鳩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com